

2017 年度キャリアママ・インターンシップ・プロジェクト 活動報告

小森 亜紀子¹、今井 章子²

Activity Report on Career Mama Internship Project in 2016-2017

Akiko Komori, Akiko Imai

1. キャリアママ・インターンシップ・プロジェクトが始まった背景

仕事と育児を両立させて働き続ける母親が増えている。昭和女子大学で 2015 年度に卒業年次の学生を対象に実施した調査（n=965）では、51.3%が結婚出産後も仕事を継続したいと考えており、専業主婦志向の 5.1%の 10 倍以上であった。2016 年度に実施した卒業年次学生対象調査（n=122）では、出産後も仕事を継続する両立コースを選択すると回答したものが 68.1%であった。女性の活躍が期待される中で社会での働き方や学生の価値観も変化している。

本学園は附属小学校を対象にアフタースクールを開始。附属幼稚園をこども園に改組して、子育て家族の支援を充実させてきた。現在、アフタースクール登録数は 100 人程度で、児童は 19 時まで施設を利用できる。17 時 30 分からは家族の迎えを待って一緒に帰宅する。

一方、仕事などの都合で定時に来られない保護者が、祖父母やシッターに頼む例も見られた。日本では学生アルバイトによるシッター制度はまだ普及しておらず、利用者と学生を支援する組織もない。事業開始前は、資格も持たず社会経験も少ない学生が子どもの世話をするのを不安に感じる家庭が多いと予測していた。しかし、保護者への事前アンケートの回答には、すぐに利用したいという意見があったためプロジェクト実施に踏み切った。

本学では、入学時から卒業後のキャリアを意識して、生涯にわたるキャリアをデザインできる力を在学中に身につけさせることを教育の目的としている。2017 年度の実就職率は 94.3%で、7 年連続で全国の女子大学中 1 位³を記録したのもその成果の一つといえる。

ライフステージに合わせた働き方をイメージできるよう、大学でのキャリア教育に加えて社会人女性に質問・相談するメンター制度も運営している。子育てママ、管理職、起業経験者など、多様な社会人女性約 300 名が大学に登録し、学生の相談相手となっている。

しかし、学生にとってロールモデルとなる身近な女性はまだ少なく、仕事と家事や子育てが両立に不安や負担感を持つ学生が多い。結婚や出産後も働き続けることを非常に困難なことと感じている。母親も父親も働きながら子育てしている家庭を見る機会も少ない。

¹ 昭和女子大学 グローバルビジネス学部 ビジネスデザイン学科 専任講師／同学 現代ビジネス研究所 事務局長／同学 女性文化研究所 所員

² 昭和女子大学 グローバルビジネス学部 ビジネスデザイン学科 教授

³ 定員 1,000 人以上の女子大学における順位である。

そこでキャリア支援の一環として 2016 年度後期から、「キャリアママ・インターンシップ・プロジェクト」を企画した。保護者に替わって学生が迎えに行き、保護者の帰宅まで児童と一緒に自宅で留守番する有償インターンシップ⁴である。附属小学校が大学と同じキャンパスにあり、校舎が隣接しており、児童と学生の顔が見えやすく動きやすい環境もプラス要因であった。

本事業は大学の現代ビジネス研究所のプロジェクトとして運営し、教職員が学生の事前学習や学生と児童・保護者（利用者）とのマッチング⁵、日々の活動、事後の振り返りまでをサポートしている。

2. プロジェクトの趣旨・目的について

本事業の目的は働く女性・男性の支援に加え、女子学生のキャリア支援に重点を置いている。学生が利用家庭の家を訪れ、リアルに職場体験や家庭環境に触れることにより、実際に仕事と子育てをどう両立させているか、何を工夫しているか、どのように協力しあっているかを知ることができる。

保護者には本事業がインターンシップであることを説明して、趣旨に賛同・協力願える保護者と契約後、サービスを提供している。本プログラムを利用しているのは、夫婦そろってフルタイムで激務をこなす家庭や、責任者として部門や会社をリードしている母親などさまざまである。

2016 年度は学生や利用者の意見や要望をまとめてマニュアル化し、より多くの学生が体験できるよう内容を充実させた。

本事業は保育や児童教育を専門とする学生以外にも広く参加を呼びかけている。シッターの体験がなくても可能な子育て支援である。先入観で「無理」だと決めつける前に、どう工夫すればキャリアママという選択が可能になるかを考え、自分なりの両立を考える体験学習である。

3. プロジェクトの概要について

2016 年度は試行期間として位置づけ、各部署と連携をはかりながら取組に着手した。利用家庭は 4 件参加学生：14 名であった。

＜事前準備期間＞

- | | |
|--------------------|--|
| 6 月 8 日～12 月 6 日： | ワーキンググループを構成し 19 回のミーティングを実施
アフタースクール・担当教員・企画担当・事務職員で検討
事務体制・研修方法・マッチング・緊急時連絡法等を決定 |
| 9 月 21 日～10 月 1 日： | 保護者対象のアンケートを実施
ニーズがあること、児童の居住地が近隣であることを確認 |

⁴ 時給、1,500 円、定期券以外の家庭までの交通費実費を担当した日に家庭で精算する。

⁵ 利用者と学生の契約書・誓約書の取り交わし、保険の手配などを含む。

- 10 月 10 日～11 月 10 日： 学生ポータルサイトで参加学生を公募
10 月 20・26 日： 学生説明会（事業の目的と内容について）約 70 名が参加
11 月 8・9 日： 学生事前研修（マナー講座⁶など）
11 月 17 日から： 参加希望申込と必要書類の提出
11 月 22 日： アフタースクール保護者説明会

＜試行期間＞

- 11 月 25 日～12 月 16 日： 学生がアフタースクールでボランティアを実施
児童との接し方を学び相性を確認する
その後保護者・児童・担当者との面談を随時実施
12 月 13・16・19・21 日： 保護者・学生・担当者による面談
自宅で学生がやるべきことを確認
学生 3 人で 1 チームを編成して児童のサポートを開始
12 月 14 日： 本事業開始
ボランティア終了学生から随時インターンシップを開始
1 月 26 日： 第 1 回全体ミーティングを開催・学生が体験を共有
2 月 15 日： 第 2 回全体ミーティングを開催・学生が体験を共有

2017 年度前期より、本格的に始動したが、2016 年度から継続して利用希望のあった家庭 1 件に加え、新規に 3 件の利用申し込みがあった。内訳は以下の通りである。

- 週 3 回利用（1 年生）： 5/31 より活動開始： 8 月休止、9 月より週 2 回に変更
週 2 回利用（2 年生）： 6/13 より活動開始： 夏休み休止中
週 2 回希望（1 年生）： 7/3 マッチング面談終了、9 月より活動開始

インターンシップ参加申し込み学生は 42 名で、新規申込者は、事前研修・アフタースクールでのボランティアを行った。前期活動に参加できた学生は 16 名であった。

2017 年度後期は 2 件の家庭を（各週 2 回利用）、7 名の学生が担当している。

4. 取り組みの効果・評価

- 学生の感想
- 1. 限られた時間に夫婦でどう家事・子育てを分担するか学んだ。
- 2. 自分の将来を具体的にイメージしやすくなった。
- 3. ロールモデルを実際に見ることで、子育てと仕事の両立に関しての価値観・考え方が変わった。
- 4. 実際に子育てと仕事を両立している方の話はリアリティがあって参考になった。

⁶ マナー講座講師は現代ビジネス研究所鈴木清江研究員が担当した。

5. 学生時代にいろいろチャレンジして体験するのがいいと聞くことができた。
6. 忙しい時間を割いて両親で家事をこなし、子どもの状態を把握している。
7. 全体ミーティングで情報を共有することで自分の経験を振り返ることができた。
8. 学生相手だと児童が甘えてしまう時があり、どう伝えて判断するのが良いか勉強になった。
9. 週半ば過ぎると児童に疲れが見られ、保護者の帰宅後にはすぐ寝られるよう時間通りにこなすことに注意を払った。
10. 保護者が教育熱心で自身でも本をよく読んでいることがわかった。好奇心旺盛なのは生きる上で必要と学んだ。
11. メディアで取り上げられる先進的な事業なので気を抜かずにしっかりとやっていきたい。
12. 子どもと接して楽しくて、保護者からいろいろ学べ、さらにアルバイトになって嬉しい。
13. 非常時の（子どもの具合が悪くなった時など）母親の対処の指示が明確で勉強になった。
14. 同じ家庭を担当する学生同士で情報共有が重要なことがわかり、スムーズにできるようになった。

● 運営者の感想

1. 学生 2～3 名でチームを編成し、1 名の児童を担当している。スケジュールの変更等についてもグループ内で連絡を取り合い対応してくれている。
2. 保護者がインターンシップの目的を理解しているため学生の学びが大きい。
3. 学生たちは、日ごろは一つの課題に集中し追求することで学びを深めているが、本プロジェクトでは、「子どものケア」「自分の学び」「業務遂行と報告」を同時進行させる必要があるため、次第に「複線的思考」「段取り力」「効率的な行動」ができるようになったことが印象に残る。
4. 子育てしながら働く女性の姿を、「忙しそう」「疲れそう」「スーパーウーマン」といった先入観にとらわれることなく、自分が参与しながら直接事実を確かめることによって、洞察力や共感力を培うことができた。
5. 児童・保護者・学科学年の異なるチームの学生とやり取りをすることにより、コミュニケーション能力が向上した。
6. 学生に責任感が生まれ、インターンシップ経験が小さな成功体験につながり、明るく前向きになった。4、5、6 の項目については、本来、高等教育において修得が期待されている能力でもあり、予想外の効果といえる。
7. 利用する保護者は本取り組みの趣旨を理解した上で参加してくれているが、学生がお迎えを担当する日は仕事に集中できる、学生の意見が聞けておもしろい、一人っ子で私立小学校に通っているので近所に友達がおらず、学生のお姉さんと遊んでもらえるのは嬉しいなどの意見も出ている。

● メディア掲載実績

1. 2016 年 12 月 14 日 日経新聞朝刊
2. 2017 年 3 月 8 日 朝日新聞朝刊
3. 2017 年 4 月 15 日 韓国国営放送「特派員報告、世界はイマ」
4. 2017 年 11 月 内閣府平成 28 年度少子化社会対策白書「トピックス キャリアママ・インターンシップ」p.131
5. 2018 年 2 月 「学研・進学情報」4 月号

5. 利用家庭からのヒアリング

2017 年度後期の利用 2 家庭に、メールにて利用の感想・意見をいただいた。以下に原文ママ掲載する。

＜A 家庭＞

インターンシップ生との対話の時間を取れるよう、また、生活ぶりを見せることで仕事をして子供を育て家族と暮らす一例を示せるようにと、色々な形で工夫をしてきた。落ち着いてゆっくりキャリア形成に関する話をする時間を持つことがなかなかできない代わりに、バス停までインターンシップ生を送り届けるまでの道のりで就職活動や希望の進路についての話をしたり、比較的ゆっくり時間が取れる時にはインターンシップ生と食事をしながら希望の進路やそれに関する意思、迷いといったことを聞いてきた。ただ、インターンシップ生にもっと有益な情報を与えることができないか、インターンシップ生は本当はもっと聞きたいこともあるのに聞き出せていないのではないかという思いも持ちながら、試行錯誤した一年間であった。

自身の大学生時代を思い返せば、社会に出た後のことはなかなか現実味のある想像ができない。そういうことも鑑みれば、インターンシップ生から毎回特段の質問が出ないことも極めて自然なことであると思うが、一方で、インターンシップの本旨にかなった利用の仕方ができているかということは、来ていただく度に考えた。

他のご家庭もおそらくは時間に余裕の無い中、同じようなことを考えながらインターンシップ生に来ていただいていたのではないかと思います。毎回のインターンシップで現実を感じ取ってもらいながら、時々、一緒にお茶を飲みながら、食事を取りながら、あるいはメールのやり取りを介して、インターンシップ生の気持ちを引き出し、社会に出て行くに当たっての気持ち固めをするお手伝いとなるコミュニケーションができると良いと思う。

インターンシップ生と娘が仲良さそうに過ごしているのを見て、お願いしてよかったといつも思っていた。娘の体調が悪い際に、インターン生が自分なりに色々と考えて世話をしてくれていて、非常に安心した。どなたにお願いしていても、頼もしいお姉さんであり、娘としても、18、19、20 になった時にどのような学生に成長して行くのかについて、

イメージができたのではないかとと思っている。同年輩の知り合いや、親戚はいないので、そういう経験は娘にとって貴重だったと思う。

＜B 家庭＞

我が家では私も娘も利用させて頂き本当に良かったという気持ちでおります。夕方一番バタバタする時間に学生さんの助けがあるのは私としては本当に助かりました。（余裕が出来たおかげで、夕方イライラ子供にあたってしまう事も減ったかも？）娘も夕方暗い道を心細い気持ちで帰宅するのと、大学生のお姉さんと話しながら帰るのでは大違いで、とても楽しかった様です。昭和女子大の学生さん方ですから、将来の自分の姿を想像したりも出来たのでは無いでしょうか？

また利用する前から昭和の学生の真面目な雰囲気を感じていましたが、今回、お世話になった皆さんの人柄や感じの良さ、責任感の強さ等に改めて感心させられました。どの方も学業に真面目に取り組み、また私立大学に通っている境遇に感謝している様子でした。ちょっとした会話から家族関係の良好さ、育ちの綺麗さを感じるお嬢さんばかりでした。それと、送り迎えで我が家は 1 時間かからないのでバイトとしてはあまり大きな金額にならないのが申し訳無かったです。次年度はアフタースクールの登録に落ちてしまい、学生さん達とも会えなくなると思うと寂しく思います。

キャリアマインターンシップは通常のシッターさん利用とは全く違う付加価値があると思うので、もっと多くの方に認知されて利用者が増えたら良いのと思います。本当にありがとうございました。

6. 今後の課題

利用する保護者の理解もあって取組の成果は大きかった。学生の意識も高く、有償インターンシップとして実施した意義があったと評価している。

今後の課題として、以下の点をあげる。

1. 利用家庭の確保
2. 参加学生事前事後アンケートデータの蓄積と効果の測定
3. 関係機関（附属小学校・アフタースクール）との連携強化
4. 学内での周知＝多様な専門分野の学生が参加しやすい環境の整備
5. 事業化に向けた学内体制の構築

本事業はロールモデルとなる子育てファミリーと学生との出会いを目的としている。社会的なニーズが高くても、限られた家族を対象に理解を得て実施するもので、広く学外にサービスを提供する予定はない。しかし、アフタースクール利用希望者が増加しているが、定員があり、利用できない家庭がある現状、アフタースクール利用者以外の附属小学校児童保護者からの利用希望にどう対応していくか検討が必要である。

以上

＜参考＞

キャリアママインターンシップ

働くママのサポートで10年後の自分を考える

内閣府が実施した世論調査で、女性がずっと仕事を続ける方がよいと答えた人が初めて半数を超えました。仕事と子育ての両立には工夫が必要ですが、子どもの成長を発見し、仕事に生きがいを感じる、楽しい毎日でもあります。そのようなロールモデルと出逢い、実態を知って刺激を受けた体験は、学生の進路選択に大きな影響を与えます。キャリアママインターンシップは、昭和女子大学がキャリア教育の一環として実施する有償のインターンシップ制度です。

1. 対象者と目的

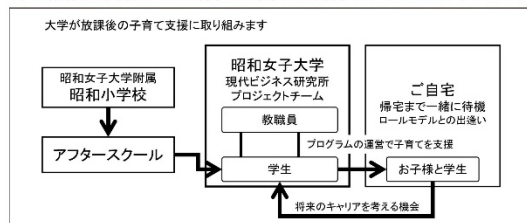
昭和高等学校のアフタースクールを定期利用するお子様が対象です。仕事などで帰宅が遅くなりがちなママを学生がサポートします。学生が仕事と子育ての両立を意識する貴重な機会をご提供ください。

2. 実施する期間

契約日（個別に決定）から 2018 年3月31日まで。
詳細は個別面談にてご相談させていただきます。

3. 運営管理者

昭和女子大学が運営・実施する学生の有償インターンシップです。現代ビジネス研究所がプロジェクトを立ち上げて教職員と学生が共同で取り組みます。
人的資源を活用して附属校のご家庭を支援する仕組みをつくります。



4. 活動の内容

- 放課後からアフタースクール開室までの指定された時間に学生がお子様を教室に迎えに行きます。
- 保護者に代わって学生がご自宅にお連れします。
- 保護者の帰宅までお子様の相手をします。（原則 21 時頃まで）
- 食事や身の回りの世話など学生ができる範囲で支援を行います。
- 帰宅支援のサービスですが合意があればカスタマイズできます。

5. インターンシップをする学生

大学でマナーや子育てに関する研修を事前に受けています。お子様とのコミュニケーションを円滑にし、信頼関係を築く第一歩として事前にアフタースクールでのボランティア活動に参加します。

6. 契約の内容

- 利用契約は現代ビジネス研究所と保護者とで交わします。
- インターンシップを実施するのは火曜から金曜の週 4 日です。
 - 利用する曜日と支援の内容は事前に取り決めます。

- 原則として同じ学生が担当しますが、頻度によっては複数となる場合があります。
- インターンシッププログラムなので自宅への送り届けだけ利用することはできません。

7. 利用料金

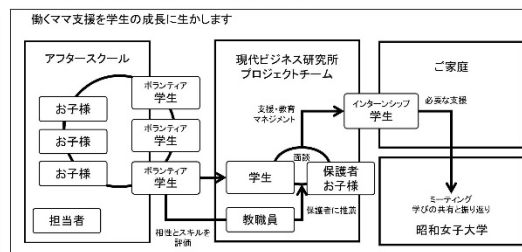
- 利用料金は 1 時間 1,500 円でその後 20 分単位で 500 円です。通学定期券以外の往復交通費を別途いただきます。
- 利用料金はご帰宅後に学生へお支払いください。

8. 家族と学生とのマッチング

学生はアフタースクールでお子様とコミュニケーションをはかります。現代ビジネス研究所が相性やスキルを評価して学生を保護者に推薦します。
保護者・学生・教職員が面談して契約するかをお互いで決めます。
正当な理由がある場合は途中で中断・交代することがあります。

9. その他

アンケート調査から 20 家族程度の利用を想定しています。
現在のところ約 40 人の学生がインターンシップを希望しています。
大学が取り組む帰宅支援サービスは珍しく先進事例がありません。
現代ビジネス研究所では様々な課題を解決しながら提供しやすく受けやすい体制を整備したいと考えます。



10. 学生支援と質の管理

教職員が活動内容を確認して必要な助言を行います。
全体ミーティングを 4 回開いて情報を共有しスキルを磨きます。
教職員が利用者にヒアリングを行いプログラムを改善します。
急病など担当学生が欠席する時は面識のある別の学生が対応します。
不測の事態に備えて学生は特別な傷害保険に加入しています。

プロジェクトチーム

昭和女子大学現代ビジネス研究所(8号館西棟1階)

グローバルビジネス学部教授 今井章子

現代ビジネス研究所事務局長 小森亜紀子

電話：03-3411-5233

E-mail：carrier_mama@swu.ac.jp